

## 適応指導教室に勤務する退職教員の不登校支援体験

### Retired Teachers' Experiences of Supporting For Non-attending Students in Adaptation Assistance Classes

坂野 葵 (Aoi Sakano) 指導：菅野 純

#### 【問題と目的】

適応指導教室に勤務する指導員の多くは定年退職後の教員である (石田・中野, 2002)。適応指導教室に関する研究や文献では、この指導員構成の偏りをふまえ、適応指導教室を退職教員の再就職の「受け皿」(石田・中野, 2002)と指摘したり、適応指導教室に通う不登校児童生徒 (以下、通室生) に適切な関わりがどの程度できているか不安が残る (谷井・沢崎, 2002) と指摘する等、指導員体制の改善を求める考察が主流である。しかし、適応指導教室における退職教員の様子についての具体的な報告や記述はほとんどなされていない。また、文部科学省 (2003) が指摘した適応指導教室における指導体制の課題が長年改善されない現状をふまえれば、退職教員が大部分を占める現在の指導体制のもとで、当面の通室生支援発展を模索する必要がある。

佐藤 (2004) は適応指導教室における不登校児童生徒との関わり体験には現役教師の教育観や指導観、関わり方を問い直し、教師の自己変容を促す機能があることを示した。したがって、退職教員が適応指導教室において不登校支援に携わることは、教員時代からの自己の変容が生じる機会ともなっていると推測される。

そこで、本研究では適応指導教室に勤務する退職教員の現役教員時代の教育実践と不登校支援を経た後の適応指導教室における不登校支援体験を明らかにすることを目的とした。現在の指導員体制のもとで退職教員が担う役割や位置づけを再考する上での一助となることが期待される。

#### 【方法】

調査対象：適応指導教室での勤務経験がある退職教員 6 名。

調査方法：2012年 8 月～12 月までに半構造化面接調査を調査対象者 1 名につき 2 回行った。

分析方法：佐藤 (2008) による質的データ分析法を援用し、事例—コード・マトリックスの機能を有したコード・カテゴリー一覧の作成を行った。

#### 【結果と考察】

事例ごとに 97～126 のコード、24～39 の小カテゴリーが生成され、全 6 事例共通の 15 の大カテゴリーに集約された。各事例の教員経験と退職、適応指導教室における職務の内容、

それにとまなう考えを含めた不登校支援体験のストーリーラインを大カテゴリーにそって結果として示した。その後、各事例の個別性に対する考察と全 6 事例の結果をふまえた複数事例の共通性に関する考察を行った。

#### 管理職期の不登校支援経験の傾向とその影響

5 事例で管理職期に退職教員は適応指導教室の存在やその具体的な活動内容は知らなかったものの、適応指導教室が不登校生徒にとっての居場所となることは認識し、評価していたことが示された。そして、この評価は退職後も維持され、適応指導教室の居場所機能を優先する意識として、通室生支援における全 6 事例に共通した指導観になっていることが示唆された。一方、それ以外に複数事例に共通した指導観や通室生支援のあり方は見出されず、個々の教員経験が、通室生に対する考え方や通室生支援のあり方に影響を及ぼしており、個人差が大きいことが明らかになった。

#### 適応指導教室勤務における葛藤

全 6 事例で退職教員は学校とは異なる適応指導教室の活動内容や通室生対応を“甘やかし”ではないかと思いつながらも、一方では現役教員の頃のような指導は抑制するという葛藤を抱えることが示された。そして、退職教員が葛藤を抱えながらも現役教員の頃のような指導を抑制する背景には、退職教員の①適応指導教室の居場所機能を優先する意識、②他スタッフの指導に合わせる意識が影響していることが示唆された。そして、勤務年数を重ねた後、この葛藤が解消もしくは軽減されることが 3 事例で示され、(i) 甘やかしと感じていた支援のあり方を変える、(ii) 甘やかしと感じていた支援の意義に気付く、(iii) 教員としての指導観から離れるといった 3 通りの過程が示された。

#### 適応指導教室における退職教員の変容

3 事例では適応指導教室で退職教員がこれまでの生徒対応が通用しない体験をふまえて、通室生支援に合わせた技術を獲得するという変容をとげることが明らかになった。さらに、退職で時間や精神的な面で余裕ができた等の退職による自身の変化が、通室生と関わる姿勢や通室生との関わり方に変化をもたらしていることが 4 事例で示された。